

山東方言軽声前変調の地理分布

遠 藤 光 暁

1. はじめに

この論文では遠藤 (2018, 2019) に引き続き、山東方言の軽声前変調の地理分布を扱い、その形成過程の一部を論ずる。「軽声前変調」とは軽声の前で他の連読変調と異なる声調パターンが現れるものであり、山東方言のほかに河北省(保定や昌黎など)や江蘇省(連雲港)などでも知られている。平山 (1983, 1998) はそれをストレスパターンの違いを条件として声調調値が別の方向に変化したものと推定したが、以下で見るように遠藤 (2018) で行った 1940 年代から 1980 年代までの 40 年でいどのタイムスパンの比較からしてもその変化過程を現実を観察されるものとして部分的に跡づけることが可能である。

2. 平山説の概要

平山 (1983) は Giet (1939) による山東西南部、済寧一帯の変調の詳細な記述に基づき、その複雑な変調が生じる前の声調調値を再構し、そこからの変化過程を推定した。Giet (1939) においては、各声調の二字の組み合わせにおいて二つ以上の変調パターンが現れ、それがストレスパターンと関係があり、多くの語例が挙げられている。これは時代を遥かに先駆ける重要な貢献であったが、ほとんど流布しておらず、平山 (1983) は著者本人から取り寄せて、原文がドイツ語で複雑多岐にわたるその詳細を読み解いて中国語で紹介した。

同一の調類において二種以上の変調パターンが存在する理由について平山 (1983) は、

① {重重} ② {重中} ③ {重軽}

というストレスパターンの違いによるものとした。ここで、{ }は音節の組み合わせの境界を示し、元は音節は○で表示され、それにアクセント記号が表示される形式だったが、入力の場合上、上では「重・中・軽」と記した。このような類別は現代北京語にも見られるもので、②の例としては例えば動詞の重畳型が該当し、特に上声では変調が生じることから後ろの音節が完全に軽声になっていないことが知られる。そして、軽声前変調で現れる調値はこのような声調交替が生じる前の本来の古調値を反映し、単字調ではそこから以下のようなプロセスを経て現在の調値に変化したと推定した：

陽平	*55 (高平)	>	*53	>	51 (高降)
去	*51 (降)	>	*41	>	412 (低降)
陰平	*11 (低平)	>	*112	>	13 (低昇)
上	*24 (昇)	>	*34	>	44 (高平)

また、以上のような古調値と類似した声調体系を「天津型」と名付け、当該地域の北側に位置する天津と南側に位置する徐州から合肥・信陽にいたる地域に分布することも図示している。

平山 (1998) では山東省西北部の德州方言に基づき同様にして以下のようなプロセスを推定している (配列順はその推定による変化の生じる順に直して引用する)：

	軽声前変調調値		古調値		中間段階		単字調値
陽平	55 (高平)	=	*55 (高平)	>	*53	>	42 (降)
去声	42 (降)	=	*42 (降)	>	*31	>	21 (低平)
陰平	21 (低平)	=	*21 (低平)	>	*212	>	213 (昇)
上声	213 (昇)	=	*213 (昇)	>	*324	>	55 (高平)

そして、

① 陽平 *55 は次第に下降調に変化して、42 となった。音節末尾は弱化しやすく、高音を音節末尾まで維持しにくいためである。

山東方言轻声前変調の地理分布

② 去声 *42 は陽平の変化に押されて、次第に低いほうに変化し、21 となった。

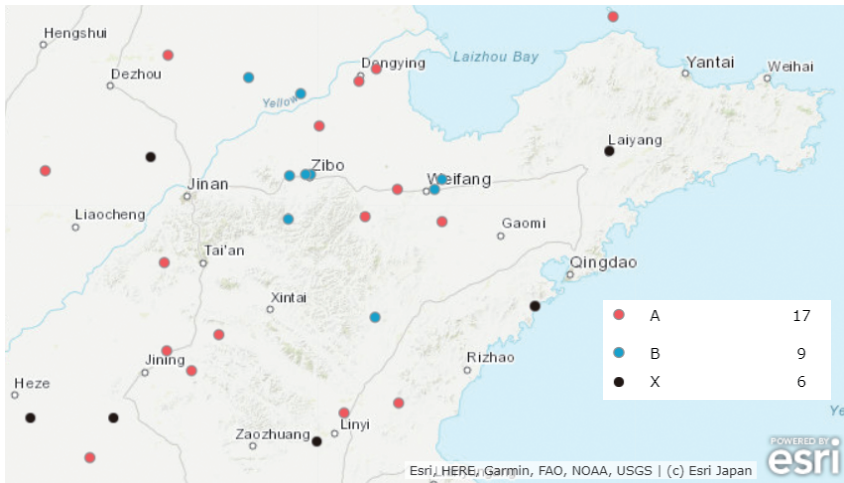
③ 陰平 *21 は去声の変化に押されて、213 となった。

④ 上声 *213 は陰平の変化に押されて、次第に高いほうに変化し、55 となった。

以上は德州型であったが、それより一段階古いものとして濰坊坊子型では以下のようなプロセスを推定した：

	轻声前変調調値	古調値	中間段階	単字調値
陽平	24 (高昇) =	*24 (高昇) >	*55 >	53 (高降)
去声	55 (高平) =	*55 (高平) >	*53 >	31 (低降)
陰平	31 (低降) =	*31 (低降) >	*212 >	214 (低昇)
上声	214 (低昇) =	*214 (低昇) >	*35 >	55 (高平)

地図 1 では (A) 德州型は赤、(B) 濰坊坊子型は青、(X) 轻声前変調が生じない地点は黒で表示してある。



地図 1 (A) 德州型と (B) 濰坊坊子型

3. 各声調ごとの比較

以下では各声調ごとに1980年代以降の資料に見られる軽声前変調の地図をまず大きく掲げる。このように山東省全域に関して変調まで含んだ記述が現れるのは文革後の1980年代になってからであり、それ以前にはごく限られた地点の情報しか得られないので地図化を行うことができない。それとの比較のために必要な Giet (1946), 山東省 (1960), 1980年代以降の単字調の地図については既に遠藤 (2018) で掲載しており、ここでは大勢が分かればよいのでその下に小さく掲げることとする。以下では平山 (1983, 1998) の推定による変化の順に沿って検討していく。山東半島先端部は別系統の膠遼官話であり、大半の方言においては軽声前変調も存在しないので、単字調の地図には含まれるものの、比較には入れない。

3.1. 陽平

地図2は陽平の軽声前変調調値の地理分布を示したものである(凡例のうち黒丸の「同」というのは単字調と同じ、即ち軽声前変調がないことを示す)。平山 (1998) の推定によると、陽平の変化過程は濰坊古調値 *24 > 德州古調値 *55 > 42 となるが、単字調は地図3-1, 2, 3, 4で見えるように Giet (1946) 以来既に高降調が優勢であり、この変化が最早期に生じたものとする推定と齟齬がない。ただし、Giet (1946) によると済南の東側に高平調と高凸調が分布し、淄博から青島の間にも高凸調が散在しており、高平型は德州型の古調値を反映する可能性があり、その後も淄博近辺に分布している。高凸型は濰坊古調値 *24 > 德州 *55 の中間段階に存在した可能性もある点は要注意である。その高凸型は1960年に至るまでに高降調に変化している。地図3-4の三段階の重ね合わせ図ではそのような変化を経た地点を青線で囲ってある(後で出てくる去声も青を使うが、陰平・上声については赤線で囲う)。

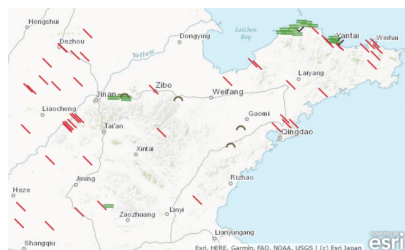
3.2. 去声

去声は濰坊古調値 *55 > 德州古調値 *42 > 21 と推定されている。地図4の軽

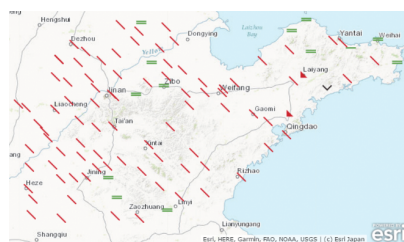
山東方言輕聲前變調の地理分布



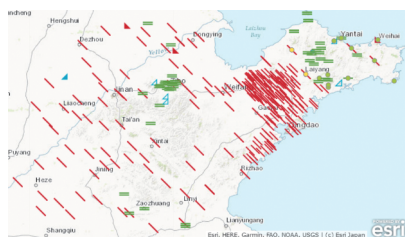
地図 2 陽平の輕聲前變調値



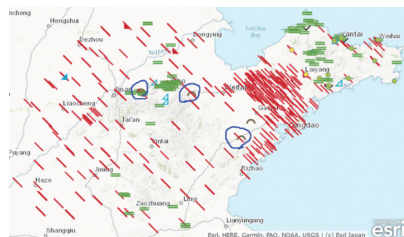
地図 3-1 Giet 1946 の陽平單字調



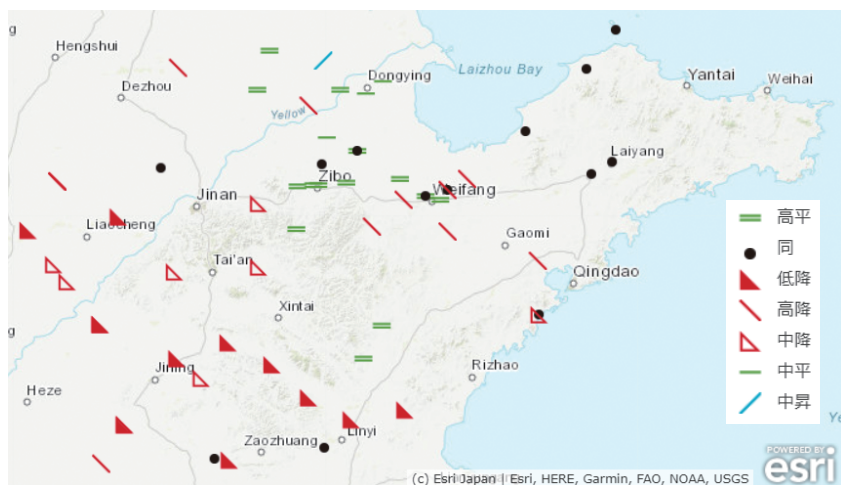
地図 3-2 山東省 1960 の陽平單字調



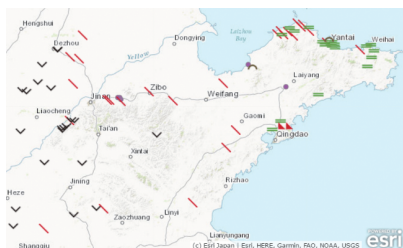
地図 3-3 1980 年代の陽平單字調



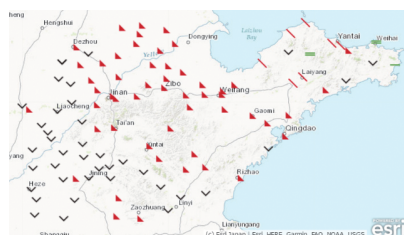
地図 3-4 3つの時代の陽平單字調綜合図



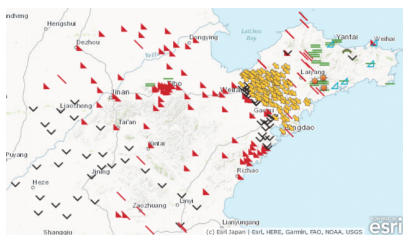
地図 4 去声の轻声前変調調値



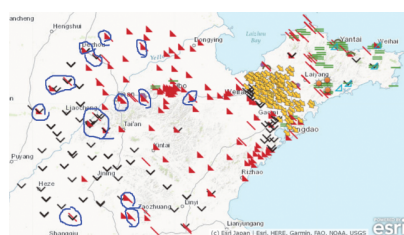
地図 5-1 Giet 1946 の去声単字調



地図 5-2 山東省 1960 の去声単字調



地図 5-3 1980 年代の去声単字調



地図 5-4 3つの時代の去声単字調総合図

声前變調調値について見ても、地図 5-1, 2, 3, 4 の単字調調値について見ても、山東省は西南部と東北部で異なる状況となっている。

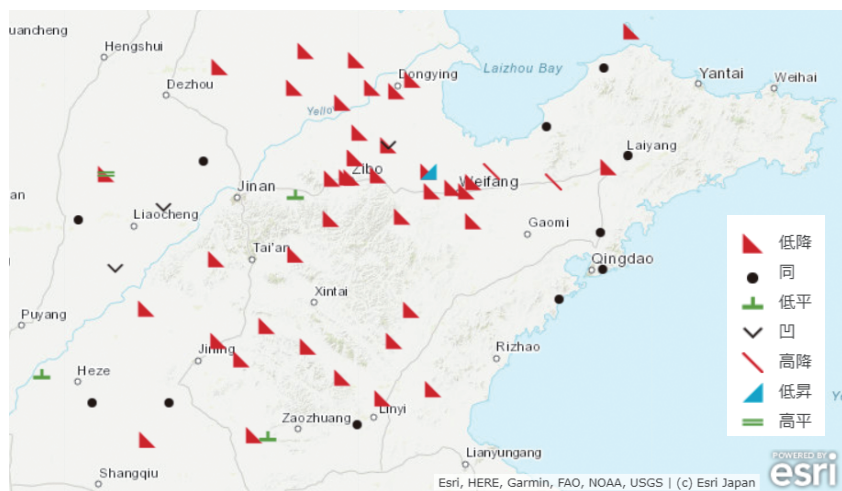
山東省東北部では Giet (1946) から山東省 (1960) の間に高降調が低降調に変化しており、平山 (1989) の德州古調値 $*42 > 21$ と合致する。

山東省西南部については平山 (1983) は $*51 > *41 > 412$ と推定しており、確かに地図 5-1, 2, 3, 4 からしても単字調は Giet (1946) の段階から 412 となっていて東北部より一段と進んだ段階になっている。この末尾の上昇部分は泰安方言を観察したところでは、実際の語彙において語末で必ず必要な場合、入らない場合、どちらでも可能な場合があるようであり、より細かな記述が必要である。

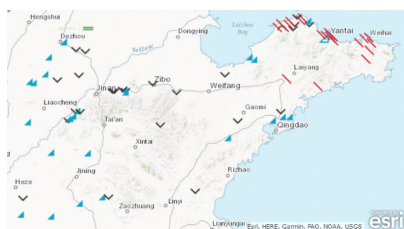
3.3. 陰平

陰平は平山 (1998) では、濰坊古調値 $*31 > 德州古調値 *21 > 213$ と推定されている。平山 (1983) の西南部に対する再構は $*11 > *112 > 13$ となっている。

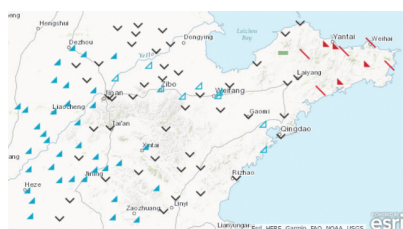
80 年代以降の輕声前變調については、地図 6 で見るように全域でほぼ低降調となっているが、単字調については地図 7-1, 2, 3, 4 で見るように西部が低昇調、中部・東部が低凹調となっている。これについては実は表記法に問題があると私は考えており、実際に済南や泰安方言の陰平を聴いた限りでは、213 と表記されていても 223 のようなゆるやかな低昇調であると観察される。これについては、1960 年頃の普通話普及の運動で、北京の 214 のような表記が広まったため、それに類推して単に表記を改めただけだと考える。ピッチの機械測定では 213 のような F0 曲線が記録されることもあるが、音節の開始部 100 ms ほどの F0 は知覚に全く関与しないという聴取実験を数年前に南開大学の王萍先生と共に行っており、近々公刊の運びになるはずである。いずれにしても、1946 年の段階でも低降調は現れず、低昇調ないし低凹調となっており、平山 (1983, 1998) の推定する前段階は見られない。また平山 (1998) の想定では、去声において $*42 > 21$ のような変化が生じたため、それに押されて陰平が $*21 > 213$ となったという順番が想定されているが、Giet (1946) の段階で既に 223 ないし 213 のようになっている、去声による押し連鎖によってこの変化が生じたわけでもない。



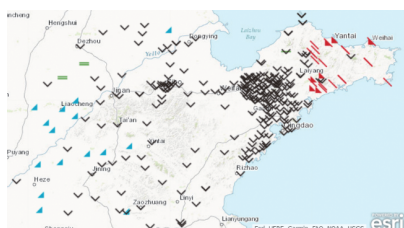
地図 6 陰平の軽声前変調の調値



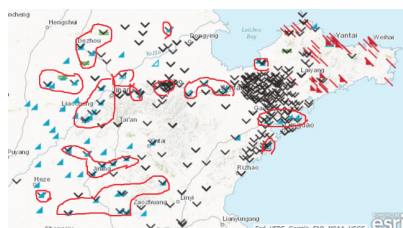
地図 7-1 Giet 1946 の陰平単字調



地図 7-2 山東省 1960 の陰平単字調



地図 7-3 1980 年代の陰平単字調



地図 7-4 3つの時代の陰平単字調総合図

3.4. 上声

上声は平山 (1998) では德州古調値 *213>*324>55, 濰坊古調値 *214>*35>55, 平山 (1983) では西南古調値 *24>*34>44 と推定されている。

地図 8 で見るように、轻声前変調については低凹調が多いものの、低降調・高昇調・高平調なども混在していて、一様ではない。地図 9-1, 2, 3, 4 からして、単字調においては青島一帯で 50 年代に低凹調が高平調に変化したのが顕著に認められ、これは済南の調形を受け入れたものと思われる。また德州近辺では 6-70 年代に低昇調が高平調に変化しており、確かに平山 (1998) が想定するような変化が起点と終点では生じている。この場合も青島付近と同様に済南の調型が拡散したものと見なされ、内的変化ではないであろうから、音声的な中間段階があるのではなく、跳躍的に変化したであろう。

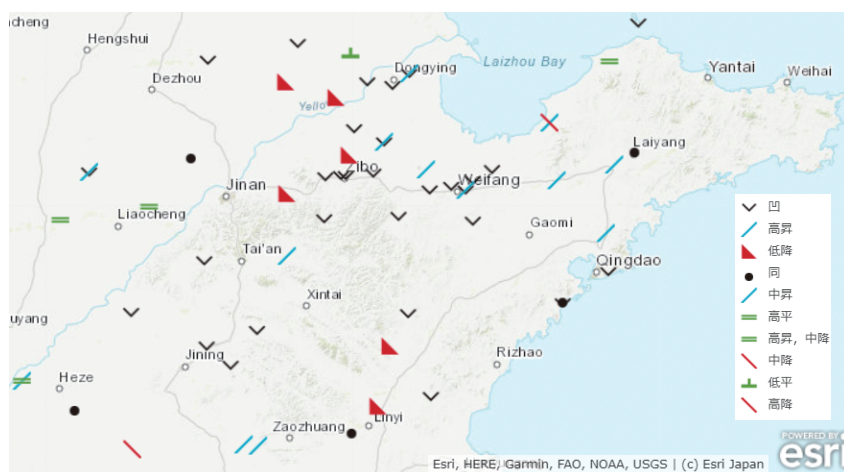
3.5. 入声

済南の東北方向のいくつかの地点では陰入声が独立の調類として保存されていることが 1980 年代以降に知られるようになった。その場合も轻声前変調が起る方言がある (地図 10)。ただし、平山 (1983, 1998) ではこうした方言は取り上げられておらず、またそれ以前の段階も分からないので、他の声調のように過去に生じた変化を追跡することはできない。

だが、年齢差が記述されている方言もあり、そうした方言では轻声前変調が進行中の変化として生じていることが窺われる。孫 (1990) によると利津方言の声調は以下のようになっている：

	陰平	陽平	上声	去声	陰入
単字調	213	53	55	21	44
轻声前	21	55	212	44	23

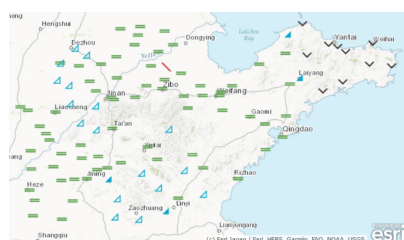
新派では単字調については陰入が陰平に合流しているが、轻声前変調では区別が残っている。それに対して老派では、単字調でも轻声前でも陰入は陰平と区別がなされている。この場合、陰入が単字調調値の類似する上声ではなく陰



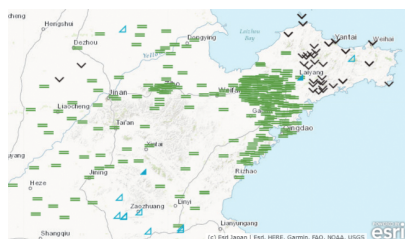
地図 8 上声の軽声前変調の調値



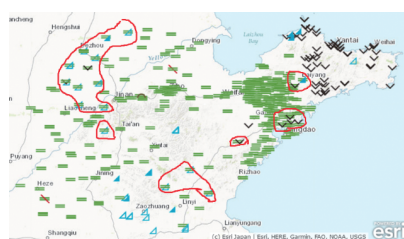
地図 9-1 Giet 1946 の上声単字調



地図 9-2 山東省 1960 の上声単字調

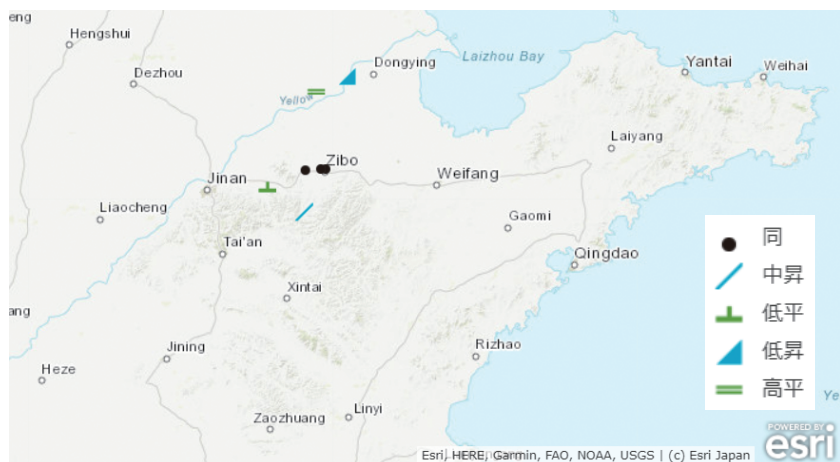


地図 9-3 1980 年代の上声単字調



地図 9-4 3つの時代の上声単字調総合図

山東方言轻声前変調の地理分布



地図 10 陰入の轻声前変調調値

平に合流しているのは、山東省における優勢方言である済南の体系に倣ったものであろう。このように二方言間の「音韻対応」規則を話者が理解していて音変化が生ずるというタイプも往々にして認められるものである。

また、高 (2011) によると章丘方言の轻声前変調で現れるタイプは以下の通り(「入声」は実際には陰入, 「轻声変調」は本稿でいう「轻声前変調」):

前字声調	陰平 213	上声 55	去声 21	入声 44
轻声変調	① 21 +2 ② 13 +2	③ 24 +54 ④ 21 +4 ⑤ 55+ <u>32</u>	⑤ 55 +32 ⑥ 21+ <u>21</u>	⑦ 23 +3

「轻声変調」の組み合わせのうち、ボールドになっているものが変調を起こすものだが、上声について言うと、③型は前字が古濁平・全濁入に由来し、④型は古清上・次濁上に由来する。つまり、この方言では既に陽平と上声が単字調では合流しているところ、轻声前変調ではその対立を保存していることとなる。⑤型は動詞の重ね型であり、歴史的由来は単字調と同様であり、陽平と上声の区別がない。

一方、高 (2016) によると章丘明水方言において、陰入声は轻声前変調では上

声（古濁平・全濁入も含む）に合流して55と発音されるが、老派では単字調では上声は55で陰入は44のように区別がなされている。しかし新派では単字調でも陰入は上声と同じく55と発音されて合流している。つまり、この場合はこれまで見てきたタイプとは異なり、むしろ軽声前変調で先に合流が生じたこととなる。

4. まとめ

以上見てきたように、平山（1983, 1998）の山東省における軽声前変調についての推定は、去声と上声に関しては1940年代以降にその変化過程と順序のまま生じたことが現実の歴史的变化として実証的に確認された。また陽平についてはこのタイムスパンでは前段階が反映されていなかったが、これもまた去声と上声よりも前に変化が生じていたとする推定と合致することとなる。陰平についてのみはそのような押し連鎖の序列には組み込まれておらず、そのプロセスも地点によってもっと複雑なものであったらしいことが垣間見られた。また上声の変化については、地理的な連続性があるので、各地点の内在的变化ではなく、山東省の優勢方言である済南の調形を受け入れたものである。

謝辞

この論文は青山学院大学経済研究所2019年度短期研究，科研費18H00670および18H05510による研究成果の一部である。

参考文献

- 遠藤光暁（2018）山東方言単字調の時系列言語地図、『経済研究』10: 1-37。
 遠藤光暁（2019）山東方言二字組変調の地理言語学的研究、『経済研究』11: 1-17。
 高晓虹（2011）《章丘方言志》，济南：齐鲁书社。
 高晓虹（2016）章丘方言入声调的研究，《汉语官话方言音韵论集》，北京：北京语言大学出版社。
 Giet, Franz, SVD (1939) Die Töne des Südshantung-Dialekts in Wortverbindungen, *Beiträge zur Einführung in das Chinesische Studium*, 4, 108 pp., Tsining: Regionhaus Taikiachuwang.
 Giet, Franz, SVD (1946) Phonetics of North-China Dialects, *Monumenta Serica*, 11: 233-267.
 山东省方言调查总结工作组（1960）《山东方言语音概况》，油印本。
 孙明钦主编（1990）《利津县志》北京：东方出版社。

山東方言轻声前变調の地理分布

平山久雄 (1983) 山东西南方言的变調及其成因, 《アジア・アフリカ語の計数研究》21: 59-81。

平山久雄 (1998) 从声調值演变史的观点论山东方言的轻声前变調, 《方言》1998 (1); 《平山久雄语言学论文集》, 北京: 商务印书馆, 2005 年。